

■ 古田雅一 教授 (大阪府立大学放射線研究センター)

今回参加された5校の発表はそれぞれ個性的で興味深く、感心いたしました。最も印象に残ったのはそれぞれの学校がクラブ活動を通じて取り組んでこられた調査、研究や科学に対する姿勢や経験が発表に如実に表れていた点です。発表の態度も積極的でよかったと思います。また参加された生徒さんから自発的に質問が飛び出し、討論できたのもうれしく思いました。

これらの質問に対する受け答えの中で、自分たちが気がつかなかったところやもう少し深く調べればよかった、と思うところが見つかったと思います。これらを大切にして今後の活動に役立ててください。また児玉先生や私の話を聞いて、放射線について今まで知らなかった点、また誤解していた点、さらには自分の考えと違う、と思った点など、さまざまな印象があったのではないのでしょうか。

これらのこともそのままにせず、もらった資料で復習したり、またより深く調べてみるのも良いかと思えます。そうした活動の中で今一度原子力発電所の事故に関するニュースや新聞記事を見てください。今までとは違った理解や疑問が生じてくるのではないのでしょうか。私たちはこの活動を来年度以降も継続したいと考えておりますので、是非また次回もチャレンジしていただき、お会いできるのを楽しみにいたしております。

■ 八木孝司 教授 (大阪府立大学大学院理学系研究科)

高校生が福島第一原子力発電所事故に関する報道の中から1つ疑問を見つけて、それについて客観的・科学的に調べて解説するという企画は、これまでになかったと思う。

このような企画を短い期間でお願いして、引き受けてくださる高校が5校もあったことが、私たちのまず最初の驚きであり、高校生諸君が夏休み期間に学校行事でもないことをよく準備してくれたことが第2の驚きである。今回の原子力発電所事故による放射性物質の汚染はあってはならないことであるが、その人体影響についての情報が混乱を極めたことはマスコミに大きな責任があると思う。

マスコミは「安全」か「危険」か2者択一の回答を「都合のいい専門家」から引き出して決めつけるのではなく、リスクという概念を一般市民にわかるようにしっかり解説すべきであった。特に若い人はキャスターやジャーナリストの発言を素直に信じてしまうので、報道の中から「科学的客観性」を見出すことの重要性を、この企画で高校生(特に理系へ進む人)に少しでもわかってもらうことができれば、私たちの目的は達したといえる。なにぶん短期間でお願いしたので、この企画の意図を十分理解してもらっていない発表もあったが、全ての高校生諸君がよく頑張って発表してくれた。

■ 児玉靖司 教授 (大阪府立大学大学院理学系研究科)

東京電力福島第一原発の事故以来、放射線による環境汚染や健康への影響が国民的関心事になっている。メディアを通して様々な情報が流布されるなかで、私は、高校生諸君が放射線に関する情報にどの程度接し、どのように理解しているのか気になっていた。

発表した5校の生徒諸君は、いずれもそれぞれのテーマの背景にある情報から説き起こして、学術的に正しい情報を分かりやすくまとめていた。スライドの随所に聴衆へのアピールの工夫とストーリー性を考えた発表が試みられていたことを評価したい。

最も良かったと感じたことは、聴衆の高校生諸君から発表者に対していくつもの質問があり、生徒同士の議論を実現できたことである。これは今回が初めての企画であったが、今後も高校生同士の議論の場を提供できるような企画を考えたい。

くらしの放射線サマースクール  
2012

第1回 ハイスクール放射線サマークラス  
実施報告レポート

開催日 2012年8月17日(金)

開催場所 大阪科学技術センター

[主催] 「みんなのくらしと放射線」知識普及実行委員会

構成団体：大阪府立大学(事務局)

(財)電子科学研究所、(一財)日本原子力文化振興財団、(社)大阪ニュークリアサイエンス協会、

(社)大阪府放射線技師会、(公社)日本アイントープ協会、(社)日本原子力学会関西支部、関西原子力懇談会

協力団体：放射線知識普及連携プロジェクト

[後援] 文部科学省、近畿経済産業局、大阪府、大阪市、堺市、大阪府教育委員会、大阪市教育委員会、堺市教育委員会、(一財)大阪科学技術センター